

# 『ツーリズムにおける哲学的諸問題』 所収論文・解説と翻訳【1】

## 「ツーリズムとは何か？諸定義、理論的諸段階、諸原理」（サンパウロ大学講師 Alexandre Panosso Netto 著）について

（解説と翻訳）神戸夙川学院大学観光文化学部講師 原 一樹

### 【目次】

1. 解説
2. 翻訳
3. 参考文献

### 1. 解説

本稿は、英国 Surrey 大学 John Tribe 教授編集・2009 年出版の『ツーリズムにおける哲学的諸問題』（“Philosophical Issues in Tourism”, Channel View Publications）に収められている、サンパウロ大学 Alexandre Panosso Netto 講師による論文の解説と翻訳である。

『ツーリズムにおける哲学的諸問題』は、「哲学的」と銘打つ著作にふさわしく、ツーリズムに対して「真」・「善」・「美」という 3 つの角度からアプローチする 16 本の論文が収録されている。いわゆる「倫理的ツーリズム」や「スピリチュアル・ツーリズム」に関する論文も収録されているが、その中でも Panosso Netto 氏の論文は真正面から「ツーリズムとは何か」という極めて根源的かつ本質的な問いを投げかけている点で、「哲学的」という形容詞に特に値するものだと言えるだろう。

Panosso Netto 氏がこの論文で扱う対象はツーリズムの「諸定義」・「理論的諸段階」・「諸原理」である。詳細は本文をお読みいただきたいが、氏は先行する理論家達の主張を手際よく整理した上で彼なりの視点からコメントを加え、最終的にツ

ーリズムに関する彼なりの定義と幾つかの原理を提案している。まずもって我々のような後学の徒にとってのこの論文の有難さは、それがツーリズム理論に関する 1 つの地図を与えてくれる点にある。氏の紹介する各理論家の言説についてはなかなか理解しづらい、或いは納得し難い部分もあるが、各自が直接にその理論家の言説に赴きその意義を検討すべきだろう。

新しい造語などを用いず平易な英語で書かれている論文である為、訳出の上で特別な工夫が必要なわけでは無かったが、訳者の拙い語学力およびツーリズム理論に関する浅学の故、思わぬ誤訳をしまっている可能性は否定できない。読者諸賢の御指摘・御叱責を待つのみである。なお、人名に関しては参考文献利用の便宜や訳出の困難さに鑑み、原則として英語表記を残した。

### 2. 翻訳

#### はじめに

ツーリズム関連の主要諸概念は、レジャー、エンターテイメント、ホスピタリティ、レクリエーションである。しかし、ツーリズムの定義は最も困難で研究者達は未だ合意に到達していない。Fuster(1971), Leiper(1979), Sessa(1985), Molina(1991), Palomo(1991), Ascanio(1992), Jafari(1995), Beni(1988), Boullon(2002)などの著者達はツーリズム研究出身ではなく、経営、建築、生物学、コミュニケーションなど、別領域の出身である。こ

の事実は、研究者達が説明をそれら別領域の1つへと「還元」する傾向を持つ故に、問題を生み出している。各研究者は自分の出自である科学の持つパラダイムや前提から出発しようとし、それ故に互いに合意に達しない。言い換えれば、似たような諸問題に対し幾つもの異なるアプローチがあるということになるだろう。

この章ではツーリズムの定義に到達することの難しさにアプローチする。ツーリズムとは何であるかに関して、諸機関や研究者達が与える幾つかの説明を提示し分析する。Kuhn (2001) に依拠する理論的モデルの幾つかを議論し、これまで展開されたツーリズム理論の学術的分断を示すこととなる。論文の最後で私は、ツーリズムにおける基礎的で、かつ望ましい幾つかの原理を強調するつもりである。加えて私はツーリズムの定義に関する新たな提案も示そうと思う。

## ツーリズムの諸定義

最初に、ツーリズムの定義を確立することの重要性を問う必要がある。

Burkart と Medlik(1974:39)は、この問題に次のように答えている。

「[・・・] ツーリズムに関するより正確な定義は、多くの目的の為に要請される。まず研究の為である。或る現象を体系的に検討する為には、それが何をカバーするかを定義せねばならない。次に統計的目的の為に。或る現象が測定される時には、それが定義されていなければならない。実際問題として、測定に利用可能な技術がしばしば測定されるものを定義する。第三に、立法的・管理的目的の為に。法律は特定の活動には適用され、他の活動には適用されない。第四に、産業的目的の為に。特定の経済活動は市場研究を産み出し、産業機関形成への基盤を与える。」

このような必要性にもかかわらず、研究者や専門家の間ではツーリズムについて全員が同意する定義が未だ存在していない (UNWTO—世界観光機関による定義でさえそうである)。提出された

諸々の定義は批判され、しばしば改善される。そしてこの事実はツーリズムが複雑な現象だという問題を強調するものだ。Fuster (1971) は、1800年の『オックスフォード簡易英語辞典』が初めて「ツーリスト」という語を掲載したと言う。「ツアー、或いは幾つかのツアーを行う者。それをレクリエーションの為に行う者。楽しみや文化を求めて旅行する者。風景など自分自身の関心対象となる多くの場所を訪問する者」がその定義である。1811年には「ツーリズム」という語は次のように定義されている。「ツアーに関する理論と実践。楽しみの為の旅行。」Fuster(1971)が引用するHaulotによると、「ツアー」という語はヘブライ語に由来し、その起源を聖書や民数記に持つ。そしてその語は発見、旅、認識、探検などの概念に対応している。

Wahab (1977) は、最初の学術的定義は Herman von Schullern がその著作『観光と国民経済』 (“Fremdenverkehr und Volkswirtschaft”) で1911年に与えたと示唆する。それによると「ツーリズム」とは「諸事業の総体。主に、国家・都市・地域の内外における外国人の入場・定住や移動に直接結びつく経済的諸事業の総体」である。

UNWTO は主に政治的・商業的・規範的諸原理に関与してきており、概念的側面には関与していない。UNWTO の定義は幾つかの国や機関で採用されており、ツーリズムに関する「公式」定義とされてきた。以下の文面に従えば、その定義は技術的なものである。

「ツーリズムは、人々がレジャーや仕事や他の目的の為に、一年以内の長さで自身の日常的環境以外の場所へ旅行し滞在する活動から成る。旅行先や滞在先での諸活動は、訪問先内部から報酬を受ける活動とは無関係なものとする。」

仕事や報酬付きの活動により動機付けられる移動をツーリズム概念から排除する定義も存在する。仮にそうすると、私は「ビジネス・ツーリズム」部門について語れなくなってしまう。しかし、仕

事の為に旅行する人々も、インフラや旅行者向けサービスを利用するのだから、確かにツーリズムの一部であるはずだ。更に、ビジネス旅行にもレジャーやエンターテインメントの活動が含まれる可能性もあろう。しかしながら今日では、ツーリズムの語はレジャー目的の旅行に主に結び付けられ、人々は多くの場合ビジネス旅行の人々をツーリストだとは認めようとしない。

Wahab (1977:26) はツーリズムを以下のように定義している。

「一国内で、或いはその地理的国境を越えて、人々のコミュニケーション手段や相互作用のリンクとして役立つ、人間の意図的活動。ツーリズムは報酬付き活動の実現ではない必要性を満たす目的を持ち、一つの地域・国家・大陸から別のそれへと人々が一時的に移動することから成る。訪問先国家にとりツーリズムとは、見えない輸出を作り出しつつ、その生産物が地元で消費される産業である。」

これは最も完全な定義だが、やはり報酬付きの移動を排除している。Jafari(1995:5)もまた彼の定義について批判を受けている。

「ツーリズムとは、日常的環境から離れた人間（ツーリスト）、ツーリズムに関する装置やネットワーク、日常的世界（非・ツーリズム）と非日常的世界（ツーリズム）及びそれらの弁証法的関係に関する研究である。」

Jafari の定義は鍵となる契機に関係している。即ち、研究である。この定義においてツーリズムとは、(1)移動、(2)ツーリズム部門の企業、(3)人間の移動により喚起されるインパクト、の3つに関する研究となる。この点について私は、ツーリズム現象とツーリズム研究との定義の仕方を知るのが重要だという事実を強調した Tribe(1997)に賛同する。Jafari は現象と研究とを混同している。Tribe(1997:640)もまた、自らの定義を提出する。

「ツーリズムとは本質的に人間により為される活動である。そしてツーリズムが生じたと言われる為に最低限存在せねばならない必要な特徴は次のものである。即ち、或る場所から別の場所への旅行行動、その旅行に参加する為の特定の動機群（仕事の為の通勤は除く）、そして目的地

における活動への参与である。」

Cooper(1993:4)は、Leiper(1979)により一つのシステムの形で提案されたツーリズムに関する着想から出発し、次のように述べる。

「ツーリズムは、旅行経験をもたらす為に何らかのやり方で組み合わされる諸個人や企業群、組織群、様々な場所の全体と考えられうる。ツーリズムは多元的で多面的な活動であり、多くの生活や多くの異なる経済活動に触れるものである。」

諸々の定義に関する混乱や困難にもかかわらず、この主題に関心を抱く研究者は多い。或る者は認識論が与える探究の理論的基盤を利用し、Thomas Luhn, Karl Popper, Edmund Husserl, Mario Bunge, Imre Lakatos といった科学哲学者達の名を挙げることもある。

定義に関する行き詰まりを打破する目的で、UNWTO は 1991 年に旅行とツーリズム統計学に関する国際会議を開き、ツーリズム部門に関する一つの定義を創り出した。しかしそれでさえ批判を免れえず、定義に関する問題はいまだに存在している。しかし近年に至り概念が洗練されてきており、ツーリズム部門もその意味と定義について合意に達しつつある。

## ツーリズムの諸モデルと概念化 ツーリズムにおける理論的諸段階

定義に関して様々な問題を議論してきたが、結果として定義することは説明することとは異なる点が明らかとなった。この意味で、ツーリズムという主題に関して彫琢された諸理論をより深く研究する必要がある。基礎に関わる 3 つの研究者グループが、ツーリズムを理解する為に Kuhn(2001)による科学パラダイム理論を利用している。しかしそれらを議論する前に、科学パラダイム理論を手短かに説明する必要がある。

各科学は研究者達に方向性を与える役目を果たす固有のパターン（パラダイム、モデル、基礎や原理）を持つ。Kuhn は科学の進展は跳躍や断絶

により生じると理解した。彼にとって、現状のパラダイムに満足しない科学者は、研究主題をより良く説明する他の理論を探求できる。パラダイムとは理論的で価値的な諸概念であり、科学者共同体はこれらの諸概念や価値を受け入れ利用する。パラダイムは、或る主題に関して普遍的に認められ、科学の進展の価値を保証する諸規則を定義するものである。

Kuhn (2001) によれば、科学にはパラダイム形成以前に一つの段階、即ち前パラダイム的段階が存在する。それは、そこで理論が創造され、形成中の或る科学の課題や困難に直面する契機だとみなされる。例えば新たな問題群の為には新たなアプローチ方法が創造される故、それらの問題群に答えることは困難や信用可能性の欠如が生じる場合がある。この段階では、この新理論のもと活発に研究する人々にしか進展は知覚されない。

Kuhn 理論を使えば、ツーリズム研究に関する学術的共同体で最も受け入れられているシステムの見解がそこにおけるパラダイムだとみなされうるだろう。しかし、ツーリズム分野においては研究者達を同じ研究方法に集合させようような唯一の理論は存在していない。これを証明する為に、他のアプローチを検討してみよう。

諸々のアプローチが理論的諸段階に分割されているとみなすことは、以下の理由により有益である。第一に、研究者はツーリズム分野における諸研究について広く包括的な観念を持つことができる。第二に、あらゆる理論や理論家はそのアプローチに応じて分類されうることとなる。第三に、諸理論を理解し、最終的にツーリズムに関する様々な理論を分類し特徴づけることを望む学生にとって、この考え方は有益な道具となる。

第一のグループは「前パラダイム的」とみなされる。このグループは、ツーリズムに関する理論的分析を提案した初期の著者達により形成されている。この段階を代表する著者は Hunziker と Krapf(1942)、Fuster(1971)、Burkart と

Medlik(1974)、Jafari と Ritchie(1981)らである。第二段階は一般システム理論を広めた著者達により形成される「ツーリズム・システム」である。このグループに属す著者は Cuervo(1967)、Wahab(1977)、Leiper(1979)、Sessa(1985)、Beni(1988)、Boullón(1995)、Martinez(2005)らである。「ツーリズム・システム」はツーリズム研究における一つのパラダイムである。というのも、システムの視点は広く普及しており、この領域の研究における射程と有効性を持ち、現時点まででツーリズム現象のダイナミクスを最もよく説明する理論であるからだ。もっとも、理解を困難にさせる幾つかの契機をいまだ示すこともあるのだが。

第二と第三の段階の間に位置づけられる著者達から成る、システム理論からの移行領域が存在する。この領域は Krippendorff(1985,1989)、Molina(2003)、Ascânio(1992)、Garcia(2005)等から成るが、彼らはその研究の基礎を一般システム理論になお置きつつも、殆ど新たなアプローチと言える進展を示している。

第三の理論的段階は「新たなアプローチ」と称される。それは多様で革新的な分析を提出することで第一の側面から区別される。この段階に属す著者達の中には、「ツーリズム・システム」パラダイムを乗り越える為の図式や解釈を提案する者もいる。このグループは Urry(1996)、Tribe(1997)、Trigo(1998,2003)、Nechar(2005)等から成る。図 3. 1 はこの説明を図示するものである (図は省略した一訳者)。多くの著者達がこれらの段階のいずれかへと分類されうるだろうが、それを行うことがこの章の目的ではない。代表者数名に言及し、各段階の 2 つの理論を分析することにしよう。

### 前パラダイム的段階

Luis Fernandez Fuster Fuster(1971)は彼のアプローチを理論と実践とに分ける。彼にとって技術的な理論が存在することは、ツーリズム概念が科学とみなされるべきことを意味しない。ツーリ

ズムが科学となるのは、体系化されていて論理的で価値のある教説が確立されることによるのみである。学術研究に関する彼の立場は、ツーリズムという主題が一つの科学的領域の特殊化として取り扱われるべきだというものである。「今日私達が抱える現象が科学的特殊化のカテゴリーを要求するに足る実体を伴う知識体系であることは明らかだ。」(Fuster1971:21)

Fusterはツーリズムという主題が科学としてアプローチされるべきだと明言しているが、それは他の諸科学と乖離したものではない。「というのも、ツーリスト現象に関する研究は、論理的に見て他の諸科学：経済学、統計学、社会科学等々を援用することで完遂されるからである。」

(Fuster1971:21) この著者にとって、ツーリズムに関する総合的研究(或いはツーリスト科学)の体系化はその研究方法に依存している。しかし彼は次のようにも考える。

「ツーリズムにおいてはいかなる方法論も適用されてこなかった。というのも、その特定の諸側面に関する多くの書誌の蓄積があるにもかかわらず、ツーリズムはその総合性においてのみ研究対象となってきたからである。」

(Fuster1971:21)

ツーリズムにおける方法論の確立は、探究される内容に依存することとなるだろう。なぜならば、もしツーリストが単独でアプローチ対象となるならば、対象を研究する為に心理学が必要となるだろうからである。結果として私は、その研究に有用な方法は心理学理論における方法だと推定するだろう。こうして Fuster は特殊な方法を創造するのではなく、他のディシプリンに属する諸々の方法を利用することを提案する。彼にとってツーリスト現象はホモ・ツーリスティクス (*homo turisticus*)、ホモ・ポリティクス (*homo politicus*)、ホモ・エコノミクス (*homo economicus*) の研究には還元されず、その研究はこれら複数のアプローチ間に関係を確立せねばならない。彼の態度はツーリズムに対する部分的アプローチを批判し、

包括的分析を提案するものである。

Jafar Jafari と Brent Ritchie Jafari と Ritchie(1981)はツーリズム分野における教育に分析と議論の基盤を提供しようという目的を持ち、ツーリズムを学ぶには超領域的方法がベストだと考える。しかしこのアプローチの持つ幾つかの限界により、為し得る最善の事はマルチ領域的、或いは間領域的な手法を受け入れることである。彼らの超領域的研究を図 3.2 に示した(図は省略した一訳者)。

このモデルによると、「ツーリズム」を研究する領域はツーリズム部門の中で議論の中心に位置づけられるべきものとなる。ツーリズムを研究する諸領域はその周囲を取り囲み、研究に寄与する他の諸部門から組織される。例えばツーリズム地理学は地理学部門に位置づけられ、そこから私はツーリズム現象の地理学的側面の研究に関する基礎を得ることとなるのである。

発表当時このアプローチは革新的で、アルゼンチン、ブラジル、メキシコ、ヴェネズエラ等の諸国家における大学学部コースの教育プログラムの幾つかの設計の基礎となった。このポジティブな側面にもかかわらず、それは Tribe(1997)と Netto(2003)により批判的に分析された。

### 「ツーリズム・システム」の段階

Raymundo Cuervo Cuervo(1967)はツーリズムに応用された一般システム理論の参照モデルを提案し利用した最初の研究者である。この点は Acerenza (2002) や Martinez (2005) によっても確認されている。Cuervoによると、ツーリズムとは以下の下位セットから構成される大きな一つのセットとなる。

C1) 航空、自動車、鉄道、海運、河川交通等のコミュニケーションの諸手段

C2) ホテル、モーテル、ホステル、ロッジ等のホスピタリティ諸施設

- C3) 旅行会社
- C4) ツアーガイド
- C5) 移動する人々が食事サービスを受ける、レストラン、カフェその他の施設
- C6) 旅行者用のありふれた土産物、旅の記念、その他消費財販売の為の商業施設
- C7) 旅行者用のありふれた土産物、旅の記念、その他消費財の製造者
- C8) 典型的な諸対象生産の為の技能
- C9) その顧客が移動する人々の大部分を構成するレジャーの中心地

これらの下位セット群それぞれが、例えば以下のように他の下位セット群へと分割される。

- C1) = {A1、A2、A3、・・・、An}
- C1 = 輸送である場合
- A1) = 国内航空輸送
- A2) = 国際航空輸送
- A3) = 国内バス輸送・・・
- An) = 他種類の輸送

分析の基礎は、これらのセットの機能がコミュニケーションであるという仮定に置かれている。この点は、次のテキストのように説明される。

「もし私が、旅の途中でコミュニケーションが起きることを受け入れるならば、私は有効な仮説としてツーリズムのセットは一つの<システム>であることを受け入れうる。そして私はまたこのシステムが持つ機能を予め規定することもできる。この場合、それはコミュニケーションである。」(Cuervo1967:33)

最後に著者は、ツーリズムとはコミュニケーションのシステムであり、世界平和の為にポジティブで有益な情報を伝えようと主張する。しかしそれはネガティブなものでもありえ、人間関係の調和に影響を及ぼしうる。これはシステムがポジティブなコミュニケーションの作用者として働き、自らを維持することへの挑戦ともなる。

Salah-Eldin Abdel Wahab Wahab(1977:3-4)は、人間がツーリズムの主要契機の一つであると言う。

「ツーリスト現象の解剖学は基本的に3つの要素から成り立つだろう。即ち人間(ツーリスト行動の作り手としての人間的契機)、空間(ツーリスト行動により必然的にカバーされる物理的契機)、そして時間(旅行や目的地での滞在により使用される時間的契機)である。」

彼の観点はツーリズムとは人間の移動へと言及する現象(当座の分析の為の新語)だというものである。彼にとって、「ツーリスト現象研究における行動からのアプローチは、現象の人間の側面や、複数国家にわたる人々のコミュニケーション・リンクの形成におけるその役割を強調するのに適切な方法である。」(Wahab1977:3)

ツーリズムの現代の形は、社会圏上のシステム基盤を表している。これは主に相互依存性や多くの諸要素間の相互作用により生じ、その目的は「健全な」ツーリズム産業が一貫性を持ち機能することである。

後に彼は言う。「全システムは2つの部分から成る。1つは一時期におけるその<状態>を記述する部分、もう1つは時空という次元において継起する諸状態を記述する<ダイナミック>な部分である。」そして彼は説明を続ける。ダイナミック・システムを通じた分析と「時空の‘連続体’におけるパターン知覚は、未来のイメージの形成を可能とする。そしてそのことが、現在の行動に基礎を置きつつ、私が未来に向けて意思決定することを可能とする。」(Wahab1977:16)

この著者は彼のシステムがどのようなものになるかのモデルを提示しなかったが、彼の提案から、私は彼のモデルが図 3.3 に示されるようなものとなるだろうと推測する(図は省略した一訳者)。

### ツーリズム・システムの段階から新たなアプローチ段階への移行

Sergio Molina Molina(2003)の提案はポスト・ツーリズムの提案である。それはツーリズムという現象が誕生以来、3つの基本的発展段階へ分割されるという理解に依拠している。即ち、ツーリ

ズム以前、ツーリズム、ポスト・ツーリズムである。最大の学術的貢献が存在するのはこの最後の段階においてである。

ツーリズム以前とは17世紀や18世紀のグランド・ツアー時代に行われていたツーリズムで、その時代には「裕福で高貴な商人一家の長男が周遊旅行をした。」この時代、技術レベルは相対的に低く、初歩的設備を伴う管理・会計システムも存在していなかった。現在も、ツーリズム以前の諸特徴を持つアトラクションを提供する会社も存在するが、「<ツーリズム以前>の存在はいかなる軽蔑の意味も含んでいない。」(Molina2003:23)

第二段階はツーリズムの段階である。それは3つのカテゴリーに区分される。

- (1) 19世紀に生まれ第二次世界大戦期まで続いた原初的な産業的段階
- (2) 1950年代から1990年代までの成熟した産業的段階
- (3) 1980年代半ばから生じたポスト産業的段階

最後に、1990年代から生まれたポスト・ツーリズム段階が存在する。

「(ポスト・ツーリズム段階は) それ以前のツーリズムに関する幾つかの基本的考察を変化させる新たなパラダイムと歴史的カテゴリーに貢献する。高度に効率的な技術と1990年代の社会的文化的現象が、産業的なタイプのツーリズムの連続性を変容させる原理と対照的に、ポスト・ツーリズムの発展を説明する。」(Molina2003:27)

彼の分析は諸カテゴリーにより為されており、彼自身のアプローチを説明する為の他の諸定義を使用している。著者がポスト・ツーリズムはアミューズメントパークで利用される技術により特徴づけられると言う場合、彼は自らのアプローチを説明する為に技術というカテゴリーを利用している。ポスト・ツーリズムは歴史分析におけるポストモダニズムと強い関係を持つ分析カテゴリーである。

**Alfredo Ascânio** この著者はツーリスト研究に焦点を当て、「旅行社会科学 (SST)」という新たな科学的領域を創造することを提案する。彼によると、この新たな科学は全種類の旅行とその様々な文脈に言及せねばならない。「それは旅行者とホスト側の相互関係と同様に、彼らの行動や、地理学的空間とその文脈について脱領域的に研究すること意識的に継続する。」(Ascânio1992:188)SSTの仕事は「旅行方法の区別される諸側面の内的・外的関係や、旅行の利用法とその影響を、個別領域の分析方法と同様に発見し説明すること」となるだろう。(Ascânio1992:189)

Ascânio はまた地理学、心理学、経済学といった個別科学の内側にもSSTの活動領域がありうるという。彼はツーリズムが一つの科学であることを信じ、こう言う。

「ツーリズムは、ツーリストを受け入れる特定のコミュニティの質や生活様式を向上(低下)させる現象に関する科学である。基本的問題は、受け入れ側コミュニティがコストよりも便益を受け取ることを目指し、ツーリスト活動の便益と損益を知ることである。」(Ascânio2007)

Ascânio にとって、ツーリズム研究は訪問者とホスト側との関係及びそれにより生み出されるインパクト、換言すれば受け入れ側コミュニティと一時的訪問者との相互依存的コネクション、ということになるだろう。彼の提案は革新的なものだ。しかし、訪問者とホスト側との関係はホスピタリティ研究、社会学、人類学によってより良く研究されるということもありうる。加えて著者は、ツーリズム科学という提案を科学的に正当化はしていない。

### 新たなアプローチの段階

**Marcelino Castillo Nechar** Nechar(2005)の提案は「批判的認識論」と呼ばれる。その目的はコンテンツ批判ではなく批判的コンテンツを前にして、ツーリズムに関する反省的で解釈的な批判を実践することである。それは人が知識構築に際

して期待しうる全てのコンテンツの理由、大きさ、解釈を検討する活動である。批判的概念に結びつくのは、解釈という概念である。解釈することは、単なる心理的構築物としての基本的な諸本質の世界へと言及するような、単純な記述以上のものである。解釈することは構築することであり、理性が抽象的手法で構築するものを実践へともたらずことである。解釈することは、伝達される諸感覚のうちにある堅固さを見抜くことを含意する。諸感覚の探求は抽象的なものである。

Nechar(2005)は、私達が科学的知識の危機に在るのみならず、哲学的な危機、それ故思考の基盤の危機にも在ると言う。彼は思考における「演繹一帰納」プロセスの回復を提案する。それはツーリズムに関する堅固な知識の構築を含むだろう。これは「伝統的な科学的ロゴス」の堅固さではなく、また論理的プロセスの「科学性」を支配し、科学的知識の内部と外部とを確定する合理性を支持するような基準の堅固さですらない。それは、言語が思考を形作り、実在を分節化し言説を関係づける場所において、実在が言語により欺かれる手法に関するものなのである。「ツーリストのリアリティ」の理解と意義に関する新たな提案は、解釈学・現象学・弁証法や他の実証主義的図式を利用するもので、ツーリストのリアリティに関する批判的提案を可能とする。

この批判的提案は、学術生活において習慣化している特定の論理的運動を前面に押し出すものである。それはまた、既成の方法論的規則を「正しく使用する」ことに依拠するのみで構築された知識の論理や意味や含意を検討しない諸研究が、ツーリストに関する知識の確実性、堅固さ、大きさのレベルを評価することの非合理性を示すものでもある。ツーリズム認識論におけるこの批判的・反省的・解釈学的提案は、異なる意味と操作プロセスを打ち立てるシステムと、明瞭な認識論的母胎とを要求することができるだろう。

Luiz Gonzaga Godoi Trigo ポストモダニティの文脈におけるツーリズムが、Trigo (1998) の分析の中心である。彼の研究は 20 世紀末におけるサービス部門を考察する。彼の提案は、新たな技術、労働世界、教育の変化、そしてマスツーリズムに関する時間空間の概念に直面する現代社会に浸透している諸問題を理解しようとするものだ。

彼はまた、ポスト産業社会での第三次産業部門における専門家の仕事を構造化する為の適切な教育哲学はいかなるものかをも議論する。市場が「思考する人々」を必要とするという原理を念頭に置きつつ、哲学がサービス専門家の養成を改善する為に貢献すると彼は言う。

以下のテキストに従えば、彼は世界の諸条件の変化により形成される新たな国際秩序を分析し、ツーリズムとレジャーを新たな社会モデルの樹立における基本的契機だと言っている。

「ポストモダンという条件が、安楽と厚生に基礎を置く新たな生活様式を導く。先進国のハイテクと経済力により、ツーリズムとレジャー分野における重要プロジェクトへの投資が可能となった。」(Trigo1998:65)

Trigo はツーリズムが現代世界を変容させる力の一つであると分析し、この力がいかに活動し自らを展開させるかを示している。研究への彼の提案は哲学を手段としているが、というのもこの科学は人々を自らの行動と社会的世界における役割に関してより反省的に為しうるからである。哲学はこの分野における矛盾やパラドクスや理解されていない諸側面を明らかにしうるツールの一つである。このような批判は、それがツーリズムの持つネガティブな諸側面（インパクト、経済的・性的搾取、実存的相対主義等）を暴露することで悩みの種をもたらしもする。しかしこの同じ批判が反省的研究、情報と科学的知識の進展、社会に関するより十全な理解をももたらず。加えて、文化をより社会的で自らを維持しうる実践へと向け直す基礎的側面として哲学が回帰することを促進もする。

## ツーリズムの諸原理

「原理」という語は、知識、法、理論や概念を展開する為の基礎として役立つ基本的で原初的な命題だと考えられている。私が原理について語る時には、何ものかの起源にも言及している。ツーリズムの本質とは何か？何が変化しないものか？何かがツーリズムだと言われる為には、どのような属性が存在していなければならないか？これらに対する答えの欠如は概念に対し不完全さをもたらし、そしてそれは生産的で知的な部門においては時に懐疑と不信を以って眺められる。それはまたツーリズムに関する認識論的基盤の科学的不完全さを暗示することとなる。

故に、諸原理を打ち立てることは根本的に重要であり、それが、何がツーリズムで何がそうでないかの境界線が引かれることを可能とする。これまでに分析した諸定義とアプローチに従えば、2つの原理が同定される。即ち**基本的なもの**と、**望ましいもの**である。

## 基本的諸原理

### 主体

ツーリズムが存在する為には、ツーリストが存在せねばならない。しかし、このツーリストはホスト側と相互作用する。ホスト側のカテゴリーには、ホスト、即ち誰かを受け入れる人間と同様に、サービス供給者（出発地と目的地における）が存在する。

### 移動

移動は2つのカテゴリーに分類される。内的移動—ツーリストが属する国家内のものと、外的移動—ツーリストが属する国家の外のもの、である。外交官の旅行と同様に、自然的・人間的カストロフによる亡命者や移民の移動はこのカテゴリーには入らない。

## 回帰の原理

家、住居、住んでいる場所からの出発の動きは、これらの場所への回帰を含意する。この概念は既にツーリズム（ツアー）—即ち円の中での旅行、私が行き、帰るという語の語源に存在する。

## 動機付けの原理

明瞭であれ不明瞭であれ、ツーリストが旅行をする理由が常に存在する。

## ホスピタリティの原理

ホスピタリティはゲストに提供される食料、飲み物、便宜を含む社会的・文化的現象を表す。それはまた何千年も生じてきた行為の基礎でもあり、人間という種の存続という事実にも根を持つものである。それはツーリズムの発展にとって基本的契機である。というのもそれは家庭的・公的・商業的文脈において、受け入れ、誰かに受け入れられるという行為と結びついているからである。

家庭的ホスピタリティは他の種類のホスピタリティを生み出す。それは家庭的（ドメスティック）な文脈において誰かを受け入れ、便宜を図り、食料を与え楽しませるといった行為と結びついている。

商業的ホスピタリティは、サービスを提供しそれに対する金銭的対価を受け取るホテルやホステル、レストラン、旅行会社やその他施設といった商業的文脈で発生する。最後に、公的ホスピタリティとは、公的文脈で人々を受け入れる行為である。それは公的機関と同様に、都市の中の公園や通り、バス停、バスターミナル、鉄道や空港、旅行情報ブースといった人々が集まる公的な場所に適用されるべきものである。

## 経験の原理

ツーリズムは、感覚的・心理学的経験（それが良かろうと悪かろうと）の結果である、非物質的で触れることのできない一連のサービスから構成されている。それによりツーリストの旅行におい

て経験が主な指標となる。加えて、人々は新たな経験を求めて旅行に出る。

### **コミュニケーションの原理**

ツーリズムはコミュニケーション行為である。ツーリストは他の文化と同じように、他の人々とも関係する。他者とコミュニケーションすること無しに旅行することは不可能である。

### **技術**

あらゆる種類のツーリズムは技術を用いる。自然の中や住み慣れたエリアでのツーリズムにおいてさえそうである。コミュニケーションと移動の技術がこの原理では最重要である。

### **望ましい諸原理**

#### **持続可能性**

サステナブル・ツーリズム、即ち継続的利用が保証されるやり方でのツーリスト資源の利用である。それは社会的・文化的・経済的・環境的サステナビリティに分類される。加えて、これら4つと比べると見えにくい、政治学的・心理学的サステナビリティが含まれるべきである。

#### **平等の原理**

人間は、社会的経済的レベル、宗教、皮膚の色や人種がいかなるものであれ、ツーリズムの法の前では全て等しい。そして人間は空間と場所におけるのと同様に、人間的・職業的關係においてそのような者として扱われねばならない。

#### **公的・私的主権の原理**

公権力の意志が私的・個人的な利害よりも上位にあるべきである。というのも、ツーリストの欲望が秩序や社会集団の欲望に対し悪影響を与える場合、それは認められるべきではないからである。

#### **他者性の原理**

他者性とは差異への敬意を意味する。それは、ホスト側との関係において、ツーリスト同士において、またホスト側同士において、ツーリストの取り持つ関係の中に存在するべきである。

### **倫理の原理**

倫理学は道徳と慣習に関する科学だと理解されている。それは正しい行動の仕方にも言及する。この原理は4つの主体に結びついている。a)ツーリズムの職業人 b)ツーリスト c)ホスト側コミュニティ d)公権力 である。

これらの諸原理は何らかの論争を喚起するかもしれない。というのも言及されていない次のような他の諸原理があるからだ。即ち、自由市場の原理、非物質的生産物の原理、不可侵の原理と二次的活動の原理。しかしながら、ここでの目的はツーリズムに関するより良い理解を可能とする為に主題に関する基礎を説明することにある。先に指摘したように、ツーリズムの定義を語ることは複雑である。文脈づけ、特徴づけ、理解について語るの方がより易しい。何故ならば、概念が定義されるやいなや幾つかの境界線が確定し、限定付きのアプローチを創り出すリスクを私は負うことになるからである。この事実を考慮した上でなお私は、これまでに言及した諸理論と諸原理とに基礎を置きつつ、ツーリズムに関する以下の定義を提案したい。

ツーリズムとは、明示されうる、または秘匿されうる理由に基づき、人間が習慣的に住んでいる場所から出発し戻ることにより引き起こされる現象である。それはホスピタリティ、他者との出会いとコミュニケーション、サービスや技術を提供する企業を前提し、それにより往復運動が可能となる。それは経済的・政治的・環境的・文化社会的環境に対しポジティブな、或いはネガティブな効果を生み出すと同時に、感覚的・心理学的経験

を生み出す。

### 最後の考察

上の議論が示すように、研究者にはツーリズムの堅固な理論的基盤を定義し設定することに対する関心がある。しかしいかなる理論も、有益だとみなされる為には価値づけられピアレビューを経なければならない。私は、ただ一人の研究者がツーリズムの無数の側面を説明しうる理論的に完全な一つのモデルを構築することなどできない、と信じている。それに加え、概念の商業化の問題が存在する。即ち、主に経済的インパクトに注力しツーリズムの明瞭な特徴づけの探究を回避するということだ。社会は諸価値や行動や人間そのものの商業化に直面している。大企業にとってのツーリズムとは、単に経済的で商業的な実践に過ぎない。彼等は恰も現象それ自身であるかのように、安楽で安全で消毒された経験を提供する。しかしながら、ツーリズムとはそれ以上のものだ。旅の中には、最初は現れない諸契機が含まれている。即ち、ツーリストの望みや熱望、新たなものの探求、新たな経験の必要性といったものである。ツーリズム研究は旅の中での人間の役割を認識する手助けをするべきであるし、古い諸問題に新たな解答を与えるよう探究すべきである。古い問題とは、頻繁に議論されるが実践的には殆ど進展が見られていない、訪問者とホストとの関係についての問題などである。新たなパラダイムが提案され続けなければならない。何故ならば、私達が正常なものや通念化されたものから身を引き離す時、私達は私達自身とその行動を別の仕方で見える可能性を持つからである。

### 3. 参考文献

Acerenza,M.(2002)

Administração do turismo.Bauru-SP:Edusc

Ascânio,A.(1992)

Turismo: La ciencia social de los viajes. Estudios

y Perspectivas en Turismo1(3),185-197

Ascânio,A.(2007)

El objeto del turismo:Una possible ciencia social de los viajes?

Beni,M.C.(1998)

Sistema de turismo:Construção de um modelo teórico referencial para aplicação na pesquisa em turismo.

PhD thesis,Universidade de São Paulo.

Boullón,R.C.(1995)

Las actividades turísticas y recreacionales.

México:Trillas.

Boullón,R.C.(2002)

Planejamento do espaço turístico.

Bauru-SP:EDUSC.

Burkart,A.J.andMedlik,S.(1974)

Tourism:Past,Present and Future.

London:Heinemann.

Cooper,C. et.al.(1993)

Tourism,Principles and Practice.

London:Pitman Publishing.

Cuervo,R.(1967):

El turismo como medio de comunicación.

In R.Cuervo(ed.) El turismo como medio de comunicación humana(pp.27-40)

México:Departamento de Turismo del Gobierno de México.

Fuster,L.F(1971)

Teoría y técnica del Turismo.

Madrid:Nacional,Tomo I

García,M.O.(2005)

El análisis del turismo desde la perspectiva de los sistemas funcionales.

PhD thesis,Universidad Iberoamericana.

Hunziker,W.and Krapf,K.(1942)

Algemeine freundenverkehrslehre.

Berna University:Zurique.

Jafari,J.(1995)

- Structure of tourism: Three integrated models. In S.F. Witt and L. Moutinho (eds) *Tourism Marketing and Management Handbook* (pp. 5-17). London: Prentice Hall International.
- Jafari, J. and Ritchie, J.R.B. (1981)  
Toward a framework for tourism education – problems and prospects.  
*Annals of Tourism Research* 8(1), 13-34
- Krippendorf, J. (1985)  
Le tourisme dans le système de la société industrielle. In A. Sessa (ed.) *La scienza dei sistemi per lo sviluppo del Turismo* (pp. 167-184). Roma: Agnesotti.
- Krippendorf, J. (1989)  
*Sociologia do turismo: Para uma nova compreensão do lazer e das viagens*. Rio de Janeiro: Civilização Brasileira.
- Kuhn, T.S. (2001)  
*A estrutura das revoluções científicas*. São Paulo: Perspectiva.
- Leiper, N. (1979)  
The framework of tourism: Towards a definition of tourism, tourist, and the tourist industry.  
*Annals of Tourism Research* 6, 390-407
- Martínez, A.J.J. (2005)  
Una aproximación a la conceptualización del turismo desde la Teoría General de Sistemas.  
México: Universidad del Caribe.
- Molina, S. (1991)  
*Conceptualización del turismo*. México: Limusa.
- Nechar, M.C. (2005)  
*La modernización de la política turística. Retos y perspectivas*. México: Centro de Investigación y Docencia en Humanidades del Estado de Morelos.
- Panosso Netto, A. (2003)  
Jafar Jafari × John Tribe: Um diálogo de teorias. *Boletim de Estudos em Hotelaria e Turismo* 1(1), 1-9
- Palomo, M.F. (1991)  
*Elementos para el estudio de la economía de la empresa turística*. Madrid: Síntesis.
- Sessa, A. (1985)  
*La scienza dei sistemi per i piani regionali di sviluppo turistico*. In A. Sessa (ed.) *La scienza dei sistemi per lo sviluppo del Turismo* (pp. 53-107). Roma: Agnesotti
- Tribe, J. (1997)  
*The indiscipline of tourism*.  
*Annals of Tourism Research* 24(3), 638-657
- Trigo, L.G.G. (1998)  
*A sociedade pós-industrial e o profissional em turismo*. Campinas: Papirus.
- Trigo, L.G.G. (2003)  
*Entretenimento: Uma crítica aberta*. São Paulo: Senac São Paulo.
- Urry, J. (1996)  
*O olhar do turista. Lazer e viagens nas sociedades contemporâneas*. São Paulo: Studio Nobel/Sesc.
- Wahab, S-E.A. (1977)  
*Introdução à administração do turismo*. São Paulo: Pioneira.